

白や澄んだ青をイメージさせる、清廉な花の香りがかすかに漂う。静まりかえる会場に司式者の声だけが穏やかに、そして厳かに響き渡った。

「汝、コンラートはこれより先、喜びの日も苦難の日も、互いを尊び支え合い、誠実にその生涯を共に歩むことを誓いますか？この誓約をもって二つの家を結び、互いの名誉と安寧を守ることを誓いますか」

「誓います」

「では、リリアナ。汝はこの男性を夫とし、富める時も貧しき時も、喜びの日も苦難の日も互いに愛し敬い、その傍らに立つことを誓いますか？」

朝から雲一つない晴天だった。念入りに吉日を選定し、会場の装飾や料理の格式も高い。

正装をした親族や列席している面々のなかには、国政の重要人物の顔ぶれまである。

その妻たちは大きな羽飾り付きの贅沢な帽子が重そうだ。メイクもばっちりで、ツンとしている。

——婚姻の事情をワケ知り顔の者は、花嫁ばかりに値踏みするような視線を送って何やら囁きあっている。

彼女の貞淑な態度での「誓います」という言葉以外を、誰が予想しただろうか。

父親に伴われた入場からずっとしおらしくうつむいていた花嫁が、はじめて琥珀色の瞳に意思をともし。

そして、身長2メートルはあろうかという体躯の新郎、コンラートの顔を見上げた。

きちんと正装はしているし、見ようによっては優しげな雰囲気。けれど、白髪交じりの頭でどこか無骨な男だ。

長すぎる間に、会場が少しずつざわめきだす。

コンラートの表情も、何かを感じ取って陰しくなった。

ところが、回り道でもされたのか小一時間経ってもいっこうに目的地へ着かない。

「すみません、私はマイーロ駅前のこの住所のお店へ行くよう言いましたよね。とても急いでいるのです」

リリアナは、普段1人で馬車に乗る機会がほとんどない。

日に焼けてしまうからと車窓から外を観察したこともあまりなかった。

「そうは言うがよう、あんたその格好はどうしたね？金は？ちゃんと貰えるんだろうな」

リリアナの問いかけにはこたえず、無遠慮にジロジロと疑いの目を向けてくる。とっさにガウン一枚を羽織ったとはいえ純白で裾の長い衣装は目立つ。

役所や拘置所へ連行されると覚悟していたが、馬車が着いた先は意外にも見知った屋敷だった。ただ、事態はさらに悪化したともいえる。

「……！嘘でしょ」

リリアナは青ざめを通り越して白い肌を真っ白にしていた。

面識のある使用人頭が言葉少なに出迎え、奥まった広い部屋へと通された。

急に部屋を用意したからか、暖炉に火が灯っていても肌寒い。

外は暗く、窓ガラスに打ち付ける風の音が狼の遠吠えのようにも思えた。そしてこの、がらんとした雰囲気。

リリアナは思わず身震いした。

コンラートは淡々としていたが、言葉には重みがある。彼はため息をつくと、しばらく何か考えているようだった。

「では、私からも提案をしよう」

「? 何でしょうか。私にできることなら何でもします」

「…言ったな」

コンラートは、リリアナに向かって進みよると手を取って、引き寄せた。リリアナは驚いて身体をこわばらせたが、かまわずに抱きかかえる。

「え、ちょっ…やめて、おろしてくださいっ」

手足をバタつかせて、もがこうとするリリアナ。

が、うまくいなされて思うようにいかない。

天蓋つきの広々としたベッドへとリリアナを運んだコンラートは、少々手荒に彼女をおろした。

「……っ！」

顔をしかめるリリアナを見下ろすコンラートは、困った様子にも見えた。

「やれ、手の焼けるお人だ。だが、それもまた一興か」

コンラートは純白の花嫁衣装に手を伸ばした。ところが、リリアナがとっさに身をかわしたことで彼の手は空を切る。

ビビーーッ!! 衣装の裾が、破けた。にじり寄ったコンラートが、踏んでいたのだった。

「ああ…」

存外ショックだったのか、眉を下げ、ため息を漏らすリリアナ。コンラートがすかさずリリアナの細い腰に手を回してきて、しっかりと抱き止められてしまう。

「あ、離して……っ」

「…む、外れないな」

コンラートが低くつぶやく。

背中のある位置にある留め具がとても硬いようだった。オーダーメイドの一点もので花嫁の身体にぴたりと合わせて仕立ててある。男の太い指を入れこむ隙間を見つけるのもひと苦勞だ。

衣装としての機能をなくした面の広い布が、放られてベッド脇の床にふぁさりと落ちる。繊細なつくりのレース飾りがふんだんに重ねられ、見事な金の刺繍で縁取られていた。

リリアナの美貌を際立たせ、参列者たちの注目を集めていた、幸福や晴れの象徴ともいえるドレスが見る影もない。

「や、もうっ、やめてくださいっ…！」

リリアナは目じりに涙を浮かべて彼女なりに抗議を試みるものの、あいにく徒勞のようだ。

コンラートは、肌着だけになったリリアナを悠々と見下ろしていた。どこか愉しげですらある。

豊かな胸を覆う、シンプルなレース飾りのあしらわれたビスチェ。シルクのショーツはクロッチや臀部以外が繊細なレース仕立てで肌が透けている。

この粗野な男の灰青の両眼にうつる情けない自分の痴態を思い、リリアナはただひたすら恥ずかしかった。

「み、みないで…！！」

「ふん…。だが、そそるな。その姿は」

ベッドから下りようと身動きをした彼女を抱きとめたコンラートは、細い腕をつかみ、腰に手を回す。

「や、いやです離して…っ！」

構わずリリアナの胸を覆っていた布地を下へ引き下ろすと、両胸がはじけるように現れる。

綺麗な丸い形で、ふわふわと柔らかそうな乳房に、ツンと硬くなりかけたうっすらと桃色の乳首。どこをとっても美しい。コンラートは息をのみ、目を細めた。

「あ、や……！！」

慌てて片手で胸を隠そうとするリリアナ。

でも、コンラートはそれを易々と制止した。

「その格好では、もうどこへも行けないだろう。まるで娼婦のようだぞ。…なおのことそそるが」

諦めろ、と言われた気がした。実際、その通りだった。中途半端にこぼれさせられた胸だけとっても、薄布を身に着けて客を誘う娼婦のようだった。

でも、彼女にはまだ望みがあった。

（アンドリューさま、信じてる…。早く来て、この男の手から私を助け出して…!）

しかし、いっこうにその気配はない。着々と望まぬ相手コンラートとの情事のみが進行していただけだった。

コンラートは何かを一心に願っているように見えるリリアナの身体をぐい、と手繰り寄せた。

腰を覆う、光沢のある薄布がめくれてなめらかな素肌がのぞく。手のひらで軽く撫でると、さらりとした感触がする。

それから、柔らかそうに揺れる胸に顔を寄せ、匂いや感触を確かめるようにしてリリアナの羞恥心を煽った。

「あっ、…あ」

コンラートが、おもむろに胸の柔肉にむしゃぶり付く。

「…うあ、や、嫌あ…！！」

張りのある白い胸が、ふにゅりと揺れる。その胸を大きな手で覆い、揉みしだく。

ちょっと力が強いようで、リリアナの眉根には皺が寄る。

肉厚な熱い舌に小突かれ、押しあてられる感触。

はじめは耐えるだけだったのが、少しずつ他の感覚も芽生える。

（き、きもち…いい？ちがう、そんなの違う！）

でも、乳首を含まれ、舌でねっとりレロレロと舐めあげられると、ビクンッ！と腰が跳ねる。

「ふうん、いい反応だな」

「うううっ、も、嫌…！！」

「いつまでその態度でいられるか、しっかりと見てやろう」

そう言うと、リリアナの脚の間に手をやったコンラートは、器用にショーツのクロッチ部分の中央のみを縦に裂いた。

一応、身体に傷がつかぬよう指を滑り込ませ、内側から。

何が起きたのか飲み込めていなかったリリアナは、急に襲ってきた強い刺激に驚く。コンラートの太い指が裂け目を撫で、ずぶりと中へ侵入したのだった。

「あゝっ、、ああ……！！」

たいして濡れていないそこに、規格外の太いものを突っ込まれたのだ。さすがに痛みを感じる。リリアナの額にはみるみる汗がにじみ、身体がこわばる。

「そう力むな。余計に痛いだけだ」

「ううー…」

コンラートは気遣うような声をかけるが、指はリリアナの奥へ、さらに奥へと潜り込む。

「いやああ！もう抜いて、抜いてくださ…！」

訴えも虚しく、グチュ、ジュポ、ジュポッと音を立てながらコンラートの指が秘処を掻きまぜ始めた。